

目次:

1) センター長挨拶	1
2) FD 活動レポート	
- Google Classroom の基本：使いはじめる前に	3
3) アカデミック・ライティング	
- ライティング教授法のベスト・プラクティス：大学・学部において採用できる 10 の法則 ...	5
- ライティングサポートデスクとはどういうものか？	12
4) 役立つ ICT ツール	
- V-CUBE を使って学外との連携を図る	16
5) 新任教員紹介	18
6) セミナー参加レポート	
- 大学 FD 学習会 2016	20
7) 編集後記	24

◆ センター長挨拶



ジェレマイア L. オルバーク
学修・教育センター長

ICU に勤務することは日々挑戦の連続です（もちろん良い意味で）。それらの挑戦は学生から投げ掛けられることもありますし、我々の学問から生まれることもあります。先進国における高等教育に対する考え方の変化は、新しい問題とチャンス私たちに提示します。テクノロジーの発展は我々に新たな可能性を提供しますが、同時に我々は新技術を習得し、それらを使いこなす新しい方法を考える必要があります。

教員が研究課題を抱え、また授業準備をきちんと行いながら、これらのこと成し遂げるのは容易ではなく、時にもどかしい作業でもあります。しかしこの作業は同時に、我々が学生に求めること、つまり、生涯にわたり学習者であること、そして、新しい知識と技術の習得が生活の一部となっている複雑で相互依存的な社会において、舵取りができる人材となることを、私たち自身が経験するいいチャンスです。学生にそのようになってほしいのであれば、私たちが行動し、モデルとならなければなりません。

しかし、これらのことを一人で行うことは難しいかもしれません。そこで学修・教育センターではこの生涯学習を少しだけお手伝いするリソースを提供しています。スタッフによるアシスタント、ワークショップの開催、インターネット上での情報公開など多岐にわたるサービスが用意されており、これからもさらに支援を拡大していきたいと考えています。

私は前任者による素晴らしい仕事を継続させたいという思いから、この 4 月より学修・教育センター長の職務に就きました。より良いサービスを提供するために、同僚の皆さんが FD に何を求め、必要としているのかを知りたいと思っています。

ご存知の通り昨今の大学は、教育的努力が成し遂げた結果の説明を、より求められるようになってきました。結果を数値で計ったり、評価したりすることが重要視されつつあります。ビジネスの世界でのモデルが私たちの仕事に適用されることも少なくありません。個人的にはこのような風潮には抵抗すべきだと思いますが、そのためには教育目標が私たちの活動とリソースの使い方を正確に示していることが必要不可欠です。学修・教育センターでは問題や傾向のパターンを見極めるためにさまざまなアンケートを実施し、収集したデータの活用方法を開発しています。今後も、信頼できる地球市民を育成するためのプログラムを職員と教員が協働して作り上げたいと考えています。

本号の内容紹介です。新しく加わった教員の自己紹介記事はぜひお読みください。また、同僚の一人ポール・ワーデン先生による、ライティングスキルの教育法についての素晴らしい記事も掲載しています。学修・教育センターのスタッフの紀平さんは、彼女が参加したセミナーの内容について報告しています。また、リモート会議システム「V-Cube」についての紹介記事もあります。きっとどれも皆さんに喜んでいただけたと思います。

(日本語訳 : CTL)

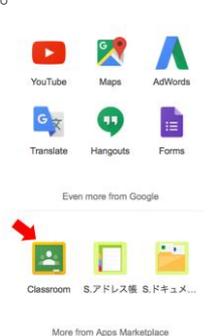
Google Classroom の基本 : 使いはじめる前に

ケネス・エノックス Google Certified Educator, リベラルアーツ英語プログラム
 クリストファー・ギャラガー リベラルアーツ英語プログラム
 ガイ・スミス Google Certified Educator, リベラルアーツ英語プログラム

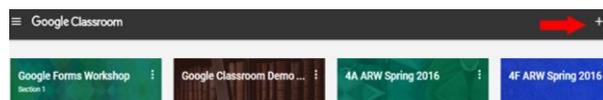
Google Classroom (「Classroom」) は Moodle にも似た学習管理システムですが、それだけでなく Google の各種アプリケーション (ドキュメント、ドライブ、Gmail など) と常に連動するようにデザインされています。Classroom については、FD Newsletter の Vol 20, No.1 で最初に取り上げました。この記事では、ICU ドメインが Google Apps for Education に登録されたことで使用可能になった Classroom の優れた点について説明しました。その中には基本的なクラスの運営が自動化され時間の節約につながったこと、そして、デジタルやオンラインの教材を用いた「ブレンディッド」学習において何かを創造したり、共同作業を行ったり、またやりがいのある課題を提供することができるという利点が挙げられます。今回はその続編として、実際に授業で Classroom を使用するための、基本的な情報を紹介していきます。まずは、クラスの作成、コンテンツの投稿、学生の招待とコミュニケーション方法について記していきます。次に、教員や学生の作成した資料を保管・整理する上でドライブがいかに重要な役割を担っているかについて触れつつ、お知らせや課題、質問の投稿方法について説明していきます。

Classroom の設定

Classroom を利用するには、ICU メール (Gmail アカウント) を開き、スクリーン右上にある Google アプリのアイコン (9 つの四角のマーク) をクリックします。さらに「もっと見る」を押して、緑と黄色の Classroom アイコンをクリックしてください。

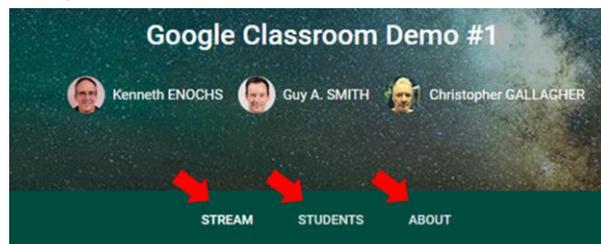


クラスを作成するには、右上の「+」ボタンを押して、「クラスを作成」を選択し、名称を入力してください。とてもシンプルなプロセスです (Moodle でコースを設定するよりも、ずっと簡単です)。



ボタンの左側には、クラスコードが表示されています。学生は、ICU の Gmail アカウントの Classroom アイコンをクリックして、このコードを入力することで、クラスに参加することができます。

作成したコースのホームページに表示されるリンクは、「ストリーム」「生徒」「概要」の 3 つです。

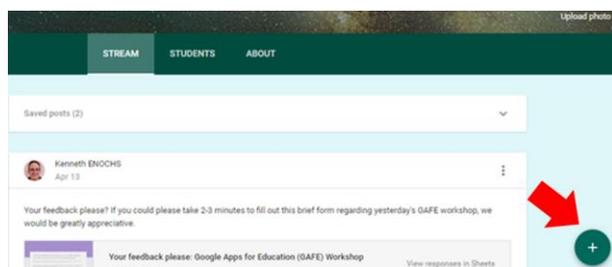


「ストリーム」では課題を投稿することができます (下に詳細を記載します)。「生徒」ページでは、学生を招待し、クラスの参加者を確認したり、Gmail アカウント経由で個人またはグループに対して連絡することができます。「概要」ページでは、コースの詳細 (内容、時間割や場所、主な提出物の期限を記したカレンダー) を記述するフォーマットが用意されており、シラバスや課題図書などが追加できるようになっています。これらの教材は、ファイルを添付したり、Google Drive にある書類やビデオ、あるいはウェブページにリンクをはることも可能です。

¹ <http://fd-newsletter.info.icu.ac.jp/backnumber/a-y-2015>

お知らせの投稿

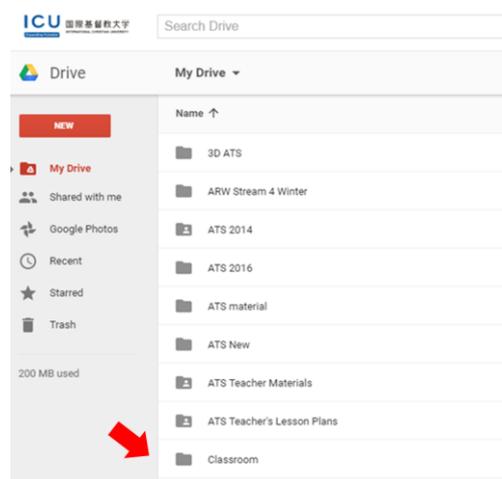
「ストリーム」ページでは学生への投稿が可能です。お知らせ、課題または質問の形式で投稿することができ、クラスの全メンバーに送信されます（一度の投稿で複数のセクションやコースに一斉に送信することもできます）。「ストリーム」ページの右下の「+」ボタンをクリックすれば、これらの機能を利用できます。



教材の共有方法は何通りかあります。1) 参照機能もしくはドラッグ・アンド・ドロップにより、添付ファイルとしてアップする、2) Google アプリケーションを利用して作成された資料（Docs など）やドライブに保管された資料に直接アクセスする、3) YouTube（もしくはその他のビデオへの URL）に直接アクセスする、4) シンプルに URL を追加する、の 4 種類です。提出期限を設定することができ、さらに誰が課題を提出したか（あるいはしていないか）を一括管理することもできます。

Classroom とドライブの連動にもぜひ注目してほしいと思います。ドライブをよくご存じない方もいると思いますが、ドライブとは Google のクラウドベースのストレージシステムです。Google のアプリを利用して作成された資料（Docs、Sheets、Slides など）は、自動的にドライブに保存されます。加えてドライブには、PDF、写真、ビデオ、さらに Word、Excel、Powerpoint などの Microsoft Office の資料のほか、デジタルデータであれば基本的に何でも保存できます。Classroom

から ICU のドライブにアクセスし、そこに保管されているあらゆる資料に直接アクセスすることができます。さらに Classroom は、教員や学生が作成したクラスの資料の管理を自動的に行うので、大幅な時間の節約になります。なぜなら教員が Classroom で作成したコースごとに、ドライブ上にフォルダが作成されていくからです。これらのフォルダには、課題のテンプレートがすべて保存されるだけでなく、Classroom に投稿された学生の提出物もすべて保存され、課題ごとに整理されます。つまり Classroom は、ドライブに保存された提出物などのファイルを直接管理できるインターフェイスであると言えるでしょう。



今回の記事が、Classroom の利用を始めるにあたり、その概要を把握する手助けとなることを願っています。この他の情報や詳細、ビデオについては、オンラインにてご確認ください。[Classroom section of the Google for Education site](https://classroom.google.com/)² (Google の教育支援サイト、Classroom のページ) に詳細がまとめられています。何かご質問がありましたら、お気軽にお声がけください。今後も学修・教育センターと協力して、Google 機能にフォーカスしたワークショップを開催したいと思っています。

(日本語訳 : CTL)

² <https://trainerlearningcenter.withgoogle.com/get-trained/classroom/introduction.html>

ライティング教授法のベスト・プラクティス： 大学・学部において採用できる 10 の法則

ポール・ワーデン ICU リベラルアーツ英語プログラム

ジョン・ピーターソン スタンフォード大学 Program in Writing and Rhetoric

スタンフォードのような大規模な研究大学でも、ICUのような小規模なリベラルアーツ大学でも、全ての教員は、学生のライティング・思考・リサーチスキルを培うというミッションに対して問題を抱えています。3つのスキルを繋げて記したのは、これらが一連のプロセスにおいて分離することができないためですが、総称して「ライティング」という言葉で表すこともあります。本稿では、まず各大学における特徴的でユニークな教授法に焦点を当て、次に、教員がクラスですぐに取り入れることができる「最も有効な教授法」について検討し、学生のスキルを養う方法を考えたいと思います（クラスが学際的であるか、または一つの領域に特化しているかは区別はしていません）。

私たちのうちの一人が教鞭をとっているスタンフォード大学では、Program in Writing and Rhetoric（「PWR」）を通じてライティング指導をしており、約50人の教員がライティング、リサーチおよびプレゼンテーションについて教えています。スタンフォードの全学部生は、入学時のライティングレベルに関わらず、これらのコースを受講することが必須となっています。PWRの1クラス当たりの学生数は15名で、授業が個々の学生に合った形で進められるように設計されています。学生の専攻科目の課題全てのドラフトをチェックする、1対1の指導も必須項目になっています。したがってコースで取り扱うテーマは、芸術の歴史からエンジニアリング、経済、コンピュータ・サイエンスに至るまで、あらゆる学問分野にわたっています。トピックに関わらず、指導の焦点は同じです。レトリックスキル、ライティングスキルおよびリサーチスキルです。学生は1年目にPWRを1つ受講し、2年目にも研究成果のプレゼンテーションの実践を含む1コースを受講します。（2年目は、例えば研究やプレゼンテーションに特化した入門コースなど、PWR以外の授業で単位を取ることも可能です）。また学部生は通常、3年目も

しくは4年目に各専攻において3つ目のライティング集中コースを受講することが必須となります。

ICUではELAの約30名の教員が、基本から実践までの、学生のアカデミックライティング習得に携わっています。ICUの学生は入学時の英語レベルによって、20~22名ほどのクラス¹に分けられ、2学期から4学期にわたりライティングコースを受講します。ELAを受講した学生は、それ以上のライティング指導は受けません。多くのICU生にとって、英語は彼らの第一言語ではなく外国語なので、ELAではもちろん、リスニング、リーディング、ディスカッションおよびスピーキングにも多くの時間を割く必要があります。「読解と論文作法（ARW）」と対になっているコースとして、「精読と英文構成法（RCA）」があり、このコースは、要約や短めの分析的エッセイ執筆などの課題を含む、集中的なリーディングスキルに焦点を当てています。

ELAのコース（Stream 1は1学期、Stream 2は2学期、Stream 3は3学期、Stream 4の多くの学生は4学期）が終了すると、学生は特定のトピックを題材とした「Research Writing」と呼ばれるコースを1科目受講します。

PWRやELAのようなプログラムにライティング指導を特化させている学科や大学が、長きに渡り、学生のライティングスキル向上に失敗してきたことは、修辞学や作文法のフィールドではよく知られていることです。なぜならライティングスキルは生涯培われる能力であり、その時々によって刷新されていくものだからです。最新の修辞学と作文法では、それぞれの状況において読み手と目的を分析するように指導しています。さらに言えば、ライティングを義務付ける学問領域やクラスにおいては、学生を特定の読み手、目的、学問領域のルールに触れさせることで、これまで培っ

¹ 一番下のレベルのstreamに属する1年生75名ほどは、さらに、「Foundations of Research Writing」という追加授業を受講しますが、このコースは実際のライティングというよりは、ブレインストーミングや文章の構成など、ライティング関連スキルにより焦点を当てています。

てきた方法を常に更新していく必要があるのです。これらは繰り返し、頻繁に行われなければなりません。学生がライティングから長期間離れると、音楽家が楽器の練習を止めたときのように、そのスキルは衰えてしまいます。

この言語とスキルの「喪失」（応用言語学の専門用語）は、ICU の学生のように、外国語で文章を書く学生に、より顕著に表れます。この「喪失」を理由の一つに、ハーバード大学のナンシー・ソマーズ氏は、先の 10 月に開催された ICU の教授会でのスピーチにおいて次のように語りました。「学生が興味深い質問をすること、専門分野のディベートに加わること、専門的研究方法を身につけること。これらを後押しするような確固たるライティングスキルを身につけることが求められています。さらに論理的思考とエビデンスに裏打ちされた独立した意見をライティングにおいて表現することも。」

学生が大学生活を通してライティングを継続的に学ぶ必要性は、スタンフォード大学が 3 年次に **writing-in-the-major** (WIM) コースの受講を義務付けている理由の一つです。またスタンフォード大学の学生の多くは卒業論文を執筆することを選択します。このようなライティング文化は、全ての学部生と専門分野の基盤となっています。スタンフォードの学生は、必修科目である学部の入門コース（先輩学生と混ざって少人数で学ぶ形式のコース）でもライティングが要求されることを知っています。ライティングはまた、複数の学問分野にまたがる方法論を学ぶ必修コースでも重要性を強調されています。

加えてスタンフォード大学は、**The Hume Center for Writing and Speaking** を強く支援しています。ここでは大学生活の全ての事柄に関するライティング（インターンシップ、就職活動、留学の申請書類なども対象とする）に、1 対 1 の集中的な個別フィードバックを行ってくれます。また大学院生に対しては、研究奨学金、学術論文、学会発表などに関するライティングのサポートも提供しています。全ての学生の、あらゆる段階のライティングに対するサポートを行うことは、ピアノやバイオリンのような楽器技術の習得と同様に、ライティングの学習が長期間にわたって取り組むべきものであり、継続的なライティング指導こそがその習得において中心的な役割を果たす、

という大学の信念を、対外的かつ国際的に明確に示すものです。

ICU においては、ELA 終了後はそれ以上のライティングコースを課すデパートメントはほとんどありませんが、いくつかの集中ライティングコース（CLA にて毎学期数科目開講される W コース）が提供されています。さらにライティングサポートデスク（WSD）が、学生のライティングの総合的なサポートをしています。アドバイザーや論文テーマによって、卒業論文を英語で執筆することにした ICU 生の約 3 分の 1 は、プランニングやドラフト執筆にあたり 4 年次の 3 学期間、アドバイザーからライティングに関するフィードバックを受けます。しかしながら ELA で単位を取得して以降、英語のライティングに関する授業をあまり受講していない場合は、学生のライティングスキルは、残念ながら既に低下している可能性があります。

学生は、以前 ELA で学んだこと（または学んだはずのこと）を忘れてしまうので、多くの ICU の教員は英語での論文指導にあたり、非常に困難な状況に直面することがあります。ICU の学生にしてもスタンフォードの学生にしても、ライティングやリサーチスキルを定着させるためには 4 年間の在学期間中、常にその学びにライティングが組み込まれている必要があります。

このような総合的な学習を促し、学生から最適なライティングを引き出すために、現代作文法と修辞学におけるいくつかの「ベスト・プラクティス」を紹介したいと思います。これは全カリキュラム共通のライティングにも、専門分野におけるライティングにも適用できるものです。このベスト・プラクティス²は英語・日本語どちらで書かれたエッセイにも応用できます（もちろんいくつかの文章の慣例は言語間で異なる部分がありますが）。このうちのいくつかを試すだけでも、学生のライティング課題のクオリティを劇的に向上させる可能性があります。ライティングの課題を読むのも、フィードバックするのも、より楽しい作業になるでしょう。

(1) 専門分野におけるライティング課題に対し、優れたモデルを学生に提示し、議論してください。

教員はこれまで、自分の学問領域に関連して、何百、何千、あるいは何万もの数のエッセイや論文を読んでいることでしょう。これに対して学生は

² これらの法則の最初のイテレーションは、2009 年 3 月発行の *Faculty Development Newsletter* 「Raids on the Inarticulate」で紹介され、3 つのパートが凝縮されたバージョンが、学修・教育発展のためのスタンフォード大学のフォーラム Teaching Commons で取り上げられました。

ごくわずか、時には論文を読まない場合もあります。教員は膨大な「知識」を頭の中に持っています。哲学者マイケル・ポランニー氏の言葉を借りるならば、哲学的な理解は学修経験に基づくものであるのです。これには、彼らの研究領域において価値があるとされる根拠というもの（著名な学者の研究を引用した「二次調査」からフィールドワークを用いる一次調査まで）や、適切な文章構造（実習レポートから熟考されたエッセイまで）、期待されるライティングのスタイル（中立的で学術的な意見から個人の経験談まで）、ならびに望ましい学術的な文書スタイル（APA や MLA のような）が含まれます。

これらの要素は、文学と生物学、教育学と経済学のように専門分野によっても異なります。また同じ専門領域でも教員によって差異があるでしょう（カウンセリング経験のある心理学者はケーススタディを重視し、一方で社会心理学者は定量的なデータを好む傾向にあります）。私たちは各自の個人的知識が、広く、時には一般的に共有されていると考える傾向がありますが、学生は、私たちの研究にどのような価値があり、どのような学術的期待がかけられているかほとんど分からないのです。

(2) 重要視するライティングの特色と、期待するライティング形式を説明、議論、強調してください。

もしあなたが学生に主題を中心に据えたエッセイを書くように指導する場合、論文の序章で論文のテーマを明確に示すこと、複雑な議論の中では論題は通常1センテンス以上であることを念頭に入れるよう指示してください。このシンプルな要件を満たすことにより、学生は議論している趣旨を冒頭から確認することが出来るため、エッセイの質を著しく向上することができます。この特徴的な修辭的意識を持つことが第二外国語でライティングする日本人学生にとって非常に重要であると考えています。なぜなら、日本語で書かれた昔ながらのエッセイは、通常、趣旨を最後に記すことが多いからです。あなたの学生が ELA の文章構成コースで主題文のライティングについて広く指示を受けたとしても、彼らの論文は大学での講義を受講する前の状態に戻ることが普通であることが文章構成学の研究結果により示されています。学生は、序章～本文～結論に至る文章構造、ならびに文章遷移やトピック・センテンスなど、指導教官から同じライティング技術を用いることを再び指摘されるまで「これまでに学んだことを忘れて

しまう」可能性があります。極端な事例を挙げると、ある ICU の教員は、最近提出された大学三年生の卒業論文の最初のドラフトを見たところ、段落を変えずに、続けて 50 ページにわたって書かれていたと、話してくれました。

授業中にある程度の時間を取り、課題においてどのような論点を期待しているのか明確に説明してください。そして、学生にエッセイの中の論点を明示するよう指示してください。もし例えば、3つの異なるジャーナルまたはデータベースより5つの記事以上の様々な情報源より補足的な根拠が必要となった場合、参考文献の箇所の余白にこれらの情報源の番号を記すよう学生に指示してください。もし法学部や文学部コースにおける文章のような証明を期待する場合は、期待する分析方法の例を具体的に学生に指示してください。学生は暗黙の了解というものを持ってはいませんが、励まし、明確な参考例を提示することで、積極的に興味を示してやる気を出しすぐに習得することが出来るでしょう。さらに言えば、論文に対する明確な評価方法を使用し、どの様な内容を期待しているかはっきり説明すること、そして評価基準を明らかにすることは、指導教官がコースでライティングにどれだけの価値を見出しているのか学生へ理解させる助けになります。最後に、もし、あなたの学生が過去に ELA のライティングコースを受講したことがある場合、過去に利用したテキストのコピーを取得し、該当箇所を学生に再度読ませてください。そうすることで、学生がこれまでライティングで学習したことを忘れてしまい、コースの受講前の状態に戻ってしまう現象を防ぐことにもつながり、上述の原則1で示したライティングの方法論に従うことによって、学生に期待することが明確になるでしょう。

(3) 複数のドラフトを作成させてください。

良いライティングは、何度も書き直された文章であり、提出締め切り日前に徹夜で作成された論文には、ほとんど価値がありません。しかしながら、学生の典型的なライティング方法と解釈は、締め切り日まで待ち、締め切り日直前に必要なことをマラソンの様にするのであり、高校時代から培ったライティングに対する標準的な考え方は、そのため、学生が自分にできる最高の論文を書き上げられるよう、そして、可能な限り最良の、ライティング—調査—書き直しすることを実践できるよう、十分に準備された戦略が必要になります。ひとつの方法としては、ライティング課題のために3～4回サイクルの授業を設定するこ

とです。第1回目の授業では、学生が各自の作成したエッセイを提出し、それを同じクラスの他の学生にすぐに配布し、彼らからフィードバックをもらいます。第2回目の授業では、あなたがエッセイを学生から受け取り、どの様なフィードバックがあるか簡単に確認します（もし、あなたがそれらを読んでいないとしても、読んでいるだろうという期待により、学生からのフィードバックの質は向上します）。第3回目の授業では、エッセイは校正のため各自の元に返却されます。そして、次の授業では（例えば次の週）、あなたの元に最終ドラフトが提出されることになります。彼らのエッセイを読むのは、たったの1回だけになりますが（最後の過程）、彼らのライティングの質は、ドラフトを1回だけ作成する場合と比べて格段に高くなります。

上述したプロセスは、担当するクラスで確保できる時間よりも長くなるかもしれません。その場合は、学生に事前にドラフトを提出させ、数クラスの後、校正されたドラフトを再度提出させることにより、彼らのエッセイの質が著しく良くなります（最初のドラフトを読む必要はないですし、コメントする必要は全くありません。）。というのも、この二段階のプロセスは、第一稿を修正することで学生が始めにすべきことなのです。Program in Writing and Rhetoricの講師によっては「もし、この論文執筆に追加で3日間与えられたら、どの様な内容を追記もしくは変更しますか？」と尋ねます。大抵の学生は、熟考された、かつ具体的な変更をしたいと思っています。講師はそこでようやく学生に対してエッセイ再提出前に追加の3日間の猶予を与えることができます。

(4) ライティングの提出前には必ず自己評価をするよう学生に指示してください。

学生に対してあなたの期待を明確にすること、そして学生が良い執筆できるよう機会を与えるためのひとつの効果的な方法としては、カバーシートを用意し、それを彼らのエッセイの一番上にホッチキスでとめさせることが挙げられます。多種多様な学術領域と、教員の個人的な好みがあることを考慮すると、学生の自己評価は、期待されているライティングの校正、議論、根拠、構造、フォーマット、そしてスタイルをより明確に理解する機会を与えてくれるのです。それだけではなく、学生が上記のことを反映させ自己評価シートをチェックすれば、彼らは自分のライティングの欠点と長所をより深く理解でき、その後ライティングを強化することができるのです（過去に ELA で使用された自己評価シートは下記を参照してください

い）。前 ELA 講師のミゲル・ソーサ氏は、どのライティングも最終稿としてレビューされるべきではなく、学生の「現段階における最高の論文（Current Best Work (CBW)）」としてレビューされるべきであると述べています。自己評価をすることは、学生が自分の CBW を評価する助けになるでしょう。

(5) 可能であればテーマとトピックの多様性を認め、他のコースと関連させることを課題で認めてください。

プロのライターでも、自分に関心の無いことについて執筆することは困難です。学生も、私たちと同様、興味があることについては、多くを学び、良いライティングができるものです。あなたの研究領域において、学生が好奇心と疑問を持てる様な「包括的」なライティングテーマを与えてください。一般的に、情報を収集するだけの課題よりも問題解決と好奇心を駆り立てる様な課題の方が学生の興味を引き、結果的により良い研究と良い執筆につながります。また、彼らの CLA のコースと関連させ執筆することについて認めることも検討してください。質の高いエッセイ（学術的な研究を含む）は統合した結果や知識と問題を関連した二つの領域で取り組むことです。しかし学生は、二つの領域に関連するエッセイを書くことについて、本能的に「ずるい」と感じてしまいます。二つの領域を関係させることやあるコースの参考文献を他のライティングのサポートのために利用することは、積極的に推奨されるべきであり、結果としてより良い興味深いエッセイに仕上がります。他のアプローチとしては、特定のトピックを学生に課すもののエッセイやレポートを提出する上で学生がより関心を持つテーマを選択することを認めることも挙げられます。他のテーマを選択しなくても、選択肢があることで学生は気が楽になります。

(6) あなたの専門領域における該当するデータベースや資料文献を学生に提示しましょう。

（または、少なくともそれが分かるようなリストを渡し専門領域から適切な資料を検索するような課題を与えましょう。） ICU 図書館のレファレンスルームには、ほぼ全ての専攻の、最新のトピックごとの百科事典（Encyclopedia of Sex and Gender、Encyclopedia of Globalization、Encyclopedia of Business、Encyclopedia of Dreams、Encyclopedia of Terrorism 等）が所蔵されています。しかし、学生は利用することはほとんどありません。なぜならば、所蔵されていることを知らないのと調査を

インターネット検索と同等のものと考えられる傾向にあるからです。このような理由から、図書館で利用できる膨大なデータベースを十分に活用していません。可能であれば、図書館とオンライン上でリンクした図書館内または ILC コンピュータルームでの端末装置が設置された教室で一度授業を行なってみましょう。そして、学生が授業の課題のために調査することになるトピックを実際に検索させてみましょう。図書館のデータベースは、学生に対して価値のある調査ツールを提供しています。教育学に関しては ERIC、教養学に関しては JSTOR、文学に関しては LION です。しかし、指導者がどのように利用するか示さない限り、このツールを活用することはありません。学生はあなたの授業以外のさまざまな分野の授業を受講しており、あなたの専門分野の専門知識にアクセスできる方法を知っているとは限らないことを忘れてはなりません。また、学生に図書館の本が貸し出し中の場合、その他5箇所の TACOPAC 図書館のいずれかから、1～2日ほどで取り寄せができることを伝えておきましょう。

(7) 学期末に負荷の重いライティングの課題を課すことはやめましょう

これは常識のようになっているのですが、大学の教師が通常設ける締め切りは、クラスの最後か、最悪の場合テスト期間だったりします。このような時期に締め切りを設定することは、事実上劣ったライティングを受領することを保障するようなものです。他に避けるべき期間は、秋や新生リトリートの行なわれる春などの大学の大きなイベント中と後です。

(8) 間違いを明らかにするものの、訂正はしないでください。

文章構成に関する研究の多くは、文法ミス等の間違いを訂正することは、長期的なライティングの向上には繋がらないことを示しています。代わりに、訂正すべき間違いを見つけたら、該当箇所に下線を引き、学生自身に間違いが何かを確認させ、自分で修正させるようにしましょう。すると、まず生徒は間違いの存在を認識するというプロセスを踏み、次に修正を行うことになり長期的なライティングの向上に繋がります。このプロセスにおいて、学生でペアを組んでももらったり、グループになってもらったりすることも有効でしょう。そうすることによって、自分の間違いより他の人の間違いに気づくことが多いですし、同級生の間違いを修正するプロセス（間違いに対する意識が高まります。）は、自分のライティングの向

上にも繋がるからです。文章の中にある間違いの数や、すべての間違いを把握し成績を付けることは避けなければなりません。これらは、ストレスをもたらし、学生を過剰に圧倒させてしまうため、優れた成果をもたらすどころか悪い結果をもたらしてしまう可能性があります。

代わりに、間違いのパターンを明らかにし、学生に今後のライティングにおいて、特定の間違いのパターンが改善されることを期待することを伝えましょう。これにより学生のモチベーションを上げ、学生自身が現実的な目標を設定することが可能になるでしょう。

(9) 学生の優秀なライティングを紹介しましょう。

各課題の後、学生から提出されたライティングの中から特に優秀なエッセイまたはレポートをいくつか選び、教室の OHC かスクリーン上にファイルをプロジェクターで映し、特に良かった点を取り上げましょう（学生に恥ずかしい思いをさせないよう名前は伏せてください。）。どのようなタイプの分析か、どのような内容か、なぜすぐれていると判断されたのか。学生は、我々と同じように、新しいことに挑戦し、失敗することから学んでいきますが、ライティングに関しては、自分のエッセイについて指摘された弱点を見ることが多く、比較の対象がないことがほとんどです。学習のプロセスの中で同級生の成功事例を見ることにより、経験が豊かになり自分が目指していくような論文、あるいは目指すべき論文がどのようなものであるか分かることができるでしょう。また、良い評価を受けた生徒は自然に次のライティングの課題へのモチベーションが高まり、ライティングに対して比重を置くようになります。スタンフォード大学のプログラムの中の Writing and Rhetoric ではこのプロセスを実践し、年度毎に特に優秀なエッセイに対して賞を授与しており、翌年度の学生はライティングの手本として参照することができます。また、PWR の各講師は前学期のライティングをコースの課題の手本となるライティングとして使用しています。ICU は特に優れた卒業論文を評価していますが、さらに卒業前のライティング課題についても評価すれば、よりモチベーションを上げ、好循環を生み出すことができるでしょう。

(10) 自分のライティング、完成版も執筆途中のものも学生とシェアしましょう。

学生は、自分のライティングを教員のものとは全く異なったもので、授業で読んでいる学術論文とは全くかけ離れているものだと感じる傾向にありま

す。しかし、就任したばかりの非常勤講師であっても主任教員であっても、私たちは本質的に問題分析やアイデアの提示、論理の証明、そして問題解決するために努力する生徒なのです。指導を受けている教員の実際のライティングほど、生徒にとって意味のあるものはありません。

なぜならそれらは、授業での教師と学生のように教師と学生を関連させるようなアイデアや苦闘を具体化しているものだからです。出版された記事のコピーを配布したりすることも良いですが、もっと効果的なのはスクリーン上で現時点においてあなたが取り組み苦闘している執筆物の一部を見せることであり、それにはすばらしい教育的な価値があります。T. S. エリオットがライティング（および人生の他の側面）について「すべての冒険は新しい始まりであり、言いようのない侵略や、粗末な道具は物事をいつも悪化させる（30-31）」と記しています。書いては探究し修正することや、時に間違った方向に行ってしまうこと、良い根拠を見つけ出す努力やつまずき、気の遠くなるようなプロセスを共有すること、一流の学者にとっても執筆は骨の折れる手ごわい作業であることを学生に見せることは、努力によって洞察力が培われ知識が構築されることを示すことができ

ます。また、理解したいという共通の探求において教師と生徒を一つにさせるでしょう。

ナンシー・ソマーズ氏の先の ICU 教授会でのスピーチ「**Writing to Learn: Teaching with Writing** 学習するためのライティング ライティングの教え」において同氏は ICU の学生に対する教育の特徴について説明し、同時に「ICU にてのみ受けられる教育とは、高い精度で注意深く読むスキル、懐疑的思考で読むスキルについて学習できること、そして、自らの読解および解釈について自ら問うことができ、かつ質問を受けることができる様な学習が出来ることであると述べられました。ICU のリベラルアーツ教育でのみ学生は二次資料ではなく一次資料を探し求める目的を学ぶことが出来るだけでなく、どのようにしてこれらの資料を精読し、資料に関しての議論をエッセイで作成するかを学ぶことが出来るのです。

上述の「ベスト・プラクティス」は、私たちがこのような努力をする上で役に立つことでしょう。

引用文献

- エリオット・T・S Four Quartets. New York: Harcourt, Brace & World 1948 年
マイケル・ポランニー *Personal Knowledge* シカゴ シカゴ大学プレス 1958 年
ナンシー・ソマーズ 「Writing to Learn: Teaching with Writing」 ICU 教授会でのスピーチ 2015年10月27日
ミゲル・ソーサ 「Allaying Fear: An Essay on the Value of Not Finishing a Piece of Writing」 *Language Research Bulletin*. 23 2008 年
ポール・ワーデン 「'Raids on the Inarticulate': Better Writing from Your College of Liberal Arts Students」 *ICU Faculty Development Newsletter*. Vol. 3 No. 2 2009年3月

SAMPLE SELF-EVALUATION

Please staple to the front of your essay.

Name _____ ID _____ Course _____

Essay Self-Evaluation

The most important part of your essay is the content: (A) the quality of your ideas and (B) the quality of your support for them. As you know, “supporting evidence” takes a variety of forms, depending upon the point you are making, but forms of support for this course include logical reasoning, facts, the results of experiments and studies (empirical evidence), data in tables or charts, paraphrase or quotations from experts, careful examination or description, interpretation, analogy, personal experience, and thought experiment. Consider if there is any way you can strengthen your argument or interpretation using different or additional evidence from one of these types. Your essay is your most important work in this course so apply your best effort to it. (1) You should revise it three or four times before handing it in. (2) You should have a classmate or friend also read a draft and make critical suggestions as well as check grammar and word usage.

When you believe that your content and your argument are the best they could possibly be, check the items below, make any additional corrections or changes necessary, and staple this sheet to the top of your essay (see the back of this page for the sample layout and formatting that you should follow).

CHECK OFF THE FOLLOWING POINTS:

Organization

- My essay has an introduction, body, and conclusion.
- Paragraphs begin with a topic sentence and end with a summing-up or an extending sentence.
- I have underlined my thesis statement.

Mechanics & Formatting

- I have carefully spell-checked my essay to eliminate misspelled words.
- I have carefully grammar-checked my essay to correct obvious grammar mistakes. (Circle the grammar checkers you have used: MS Word, grammarly, ginger.com, or www.grammarcheck.net/editor/)
- I have used 1.5 line spacing with no additional spaces between lines.
- I have indented all paragraphs 5 spaces (see back for model).

Citations & Works Cited

- There is a citation after each fact, idea, figure, paraphrase, summary, or quotation from another source.
- The citations are in the MLA format used in this course; namely, author + page (Johnson 48) or if no author is listed then by article title + page (“Jung’s View of Art” 63) or in the style I use in my major (please circle): APA (American Psychological Association), CMS (Chicago style), or CBE (Council of Biology Editors).
- There is a Works Cited page (or a References section) at the end of the essay with the authors, titles, publishers, and publishing dates of all of the sources I refer to.

Peer Evaluation

- One or more of my classmates or friends has edited and given me advice about this essay.

His or her name is: _____

ポール・ワーデンは、ELA の課程上級准教授です。ジョン・ピーターソンは、スタンフォード大学の Program in Writing and Rhetoric の講師で、スタンフォード大学の学生の必修コースである 1 年次のライティングコースをコーディネートしています。同氏はまた、スタンフォード大学のライティング指導に関する FD ワークショップをまとめています。

(日本語訳 : CTL)

ライティングサポートデスクとはどういうものか?

利根川 樹美子 博士(図書館情報学)
ライティングサポートデスク、図書館

ICUでライティングを指導する先生方は、ライティング支援のチュートリアルをどのようにお考えでしょうか。それからライティングサポートデスク(WSD)をご存知でしょうか?本稿では、より詳しくWSDを知っていただくために、その概要をまとめてお伝えします。

(1) WSDのショート・ヒストリー

WSDはICUのアカデミックライティング支援組織です。教養学部長室と図書館の協同運営のかたちを取っています。専門トレーナーの研修を受けた大学院生がWSDチューターとなって、レポートや卒論の書き方などのチュートリアルを学生に実施しています。

「国際基督教大学教学改革基本計画」(2005年3月)にもとづいて2005年6月に教学改革委員会(Academic Reform Committee: ARC)が設置されました。WSDはARCの設置を契機として誕生することになります。ARCによる「教養学部教学改革案」(2006年4月)が承認され¹、教養学部改革に取り組みられました。その”渦中で”作成された『リベラル・アーツプログラム自己点検報告書』の「A 教育改革 4 言語能力と記述力強化」で、「ライティング・センター設置」が提案されたのです。

2009年版『国際基督教大学自己点検・評価報告書』第1章の”改善方策”には、”ライティング・センター設置という課題に早急に取り組む必要がある”と書かれました²。図書館内にライティング支援組織のパイロット版を設置することが決定され、レファレンスサービスセンター(RSC)のスタッフがこの仕事を兼務することになりました。2010年秋のあわたたしい準備段階を経て、同年12月にWSDは始動しました。

2011年12月には、文部科学省研究振興局情報課が刊行した『大学図書館における先進的な取り組みの実践例：大学の学習・教育研究活動の質的

充実と向上のために』で、国際基督教大学のWSDが取り上げられました。ラーニングコモンズの実践例が比較的多く取り上げられるなか、学生へのアカデミックライティング支援に特化した実践例はWSDのみでした³。

2013年度までは、WSDはライティング・センターのパイロット版と位置付けられていました。その目的は(1)学生にライティング支援のニーズがあるか、(2)ライティング支援を推進するにはどのような課題があるかを把握することにおかれしました。

ところで、2013年度から文科省のグローバル人材育成推進事業資金を用いたW-courseの取り組みが始まりました。これは、既存の英語開講科目における教育目的に加えて、”学生の英語ライティング力の向上”も目指す科目をW-courseに指定するものです。そして、W-courseの担当教員、コーディネーター、W-courseチューター、そのトレーナー、行政部、WSDが協力して、W-courseチュートリアルなどを通じて受講生の英語ライティング力の向上を図っています。

2014年度からはW-courseとWSDの連携強化によって全学的ライティング支援機能の拡充を目指すことになりました。特にチューターの研修体制と情報交換・共有の場の整備を図ってきました。WSDチューターワークショップは毎学期4回から7回、チューターミーティングは毎学期2回から4回開催しています。WSDの歩みを簡単に図1にまとめました。

¹ 国際基督教大学『国際基督教大学自己点検・評価報告書』2009, p. 13.

https://www.icu.ac.jp/about/docs/icu_report2009_2.pdf (参照 2016-06-17)

² 同上、P.14-15.

³ 文部科学省研究振興局情報課『大学図書館における先進的な取り組みの実践例：大学の学習・教育・研究活動の質的充実と向上のために』文部科学省, 2011.12, 40 p.

http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/attach/1314099.htm (参照 2016-07-19)

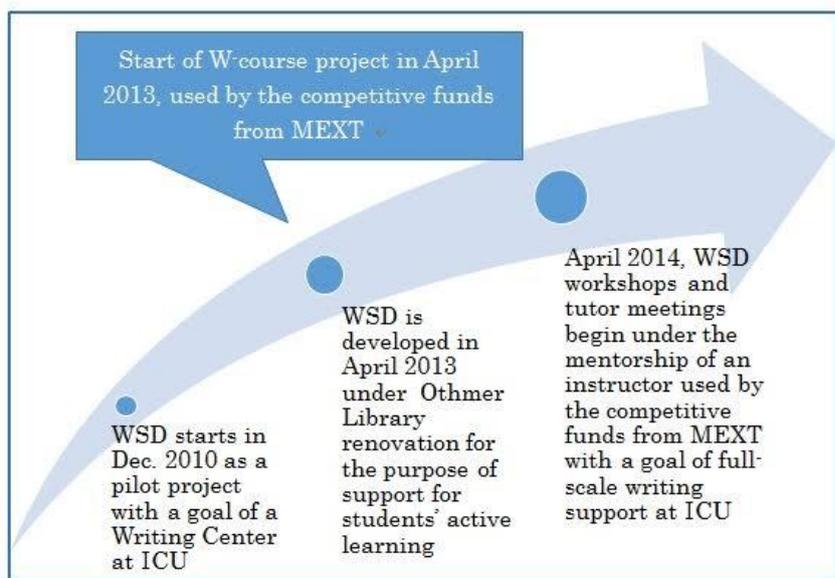


Figure 1:A Brief History of Writing Support Desk

なお、グローバル人材育成推進事業の中間評価では、国際基督教大学は最高の「S」評価を受けました⁴。WSDは国際基督教大学のこの事業で、学生へのアカデミックライティング支援の側面から貢献することができました。

(2) チュートリアル of 仕組みと特徴

学生はオスマー図書館 1 階のレファレンスサービスセンター (RSC) にある「WSD チュートリアル予約専用パソコン」で予約します。月曜から金曜までの 8:50 から 17:30 に受け付けています。スタッフはチューターに最終確認した上で、チュートリアルの予約を確定します。

チュートリアルは 1 コマ 40 分です。チューターはその前 10 分で準備をし、後の 10 分でチューターレポートを書き、後片付けをします。合わせて 60 分の仕事です。場所はオスマー図書館地階、WSD エリアの三つのブースです。

ブースの前方に置かれた大きな細長い二つのデスクでは、予約不要チュートリアルが行われます。学期内の月曜から金曜のランチタイム・4 限・5 限ならチューターがデスクに常駐しているので、学生は予約無しで相談にのってもらえます。

WSD チューターの特徴は多様な国籍の大学院生が働いてきたことです。日本、アメリカ、フィリピン、インド、パキスタン、中国、フランス、スペイン、ロシア、ネパール、ミャンマー、ベネズエラ等々。研修ワークショップはトレーナー、コ

ーディネーターの先生方の努力で英語・日本語両方に対応しています。チューターミーティングは英語、日本語どちらで話してもよいのですが英語が圧倒的に多くなっています。国費奨学生を含む博士後期課程の院生の他、修士課程では Rotary Fellows, JDS Fellows の活躍が目立っています。

チュートリアルの特徴はまだ一文字も書いてない構想段階やアウトライン段階での相談が多いことです。2015 年度の予約制チュートリアルのうち、構想段階・アウトラインの段階のものが 38% を占めました。つまりライティングの初期の段階からチュートリアルを活用する学生が相当いることを示しています。

また、WSD では日本語・英語のセッションを提供していますが、日本人学部生の申し込みによる英語ライティングのセッションが増加傾向にあることも特徴の一つです。2015 年度の予約制セッションのうち、執筆言語が英語のものは全体の 42% を占めました。

こうしたことからチュートリアルは、ふだんキャンパスではあまり対話することのない学部生と大学院生、あるいは母国語が日本語の学生とそれ

⁴ 経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援プログラム委員会
「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援 中間評価結果の総括」2015.3.
http://www.jsps.go.jp/j-gjinzai/data/chukan_hyoka/hyoka_kekka/h26_hyoukakekka_all.pdf (参照 2016-07-19)

以外の母国語の学生が対話する国際交流の場ともなっています。チューターミーティングも多様な文化の院生が集まって話し合う場となっていて「ICUらしい」とよくいわれます。

(3) WSD チュートリアル・セッション数の推移

WSD が活動を開始して以降の年度別セッション数の推移を図 2 に示します。

チュートリアルは大きく 4 種類に分かれます。「WSD チュートリアル」には「予約制」と「予約不要」があります。「W-course チュートリアル」は前述の W-course の受講生が申し込んだセッションです。「JDS チュートリアル」は大学院修士課程の JDS Fellows を対象とするセッションです。JDS 委員会の承認を得た博士後期課程の大学院生が JDS チューターとなって担当しています。

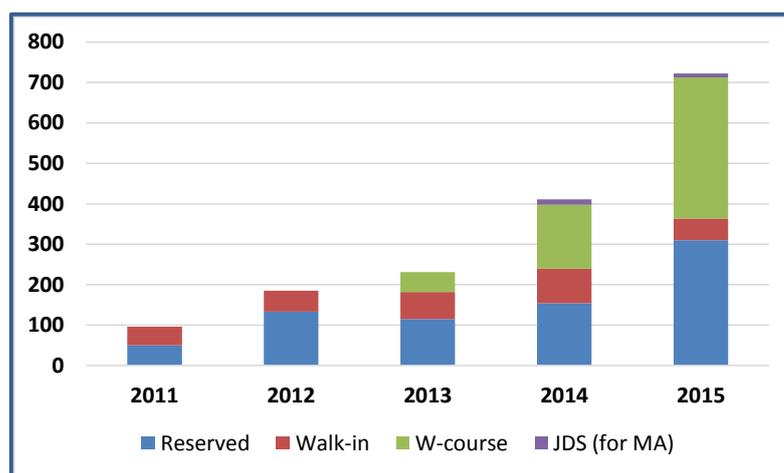


Figure 2: Number of WSD Tutorial Sessions, AY2011 to AY2015

年度別の延べセッション総数（リピーターを含む）は、平均すれば、前年度比 168%の増加を示しました。増加の主な要因は、さまざまな施策の実施による予約制 WSD チュートリアルと W-course チュートリアルの増大にあります。2015 年度の延べセッション総数は 722 件にのぼりました。これは目安として、学部生（約 2,800 人）の 4 人に 1 人の割合に相当します。

(4) WSD チュートリアル満足度アンケート調査の結果

セッションを終えた学生には「WSD チュートリアル満足度アンケート調査」への回答をお願いしています。質問は「チューターの説明の分かりやすさ」「答えの明確さ」「話しやすさ」「セッション時間」「職員の対応」など 11 項目、回答の選択肢は「非常にそう思う」「そう思う」「そう思わない」「非常にそう思わない」の四択です。満足度は「非常にそう思う」がもっとも高く、次が「そう思う」です。年度別に全体の回答数における「非常にそう思う」と「そう思う」の回答数の百分率を計算して、表 1 に示しました。

WSD 設立から 5 年間の調査結果をみると、「非常にそう思う」の回答数が 69.8%から 84.6%にわたり、平均 75.6%でした。「そう思う」も加えたポジティブな回答の合計数は 96.2%から 97.5%で推移し、平均 96.7%にのぼっています。

表 1 WSD チュートリアル満足度：「非常にそう思う」＋「そう思う」の百分率（%）

年度	2011	2012	2013	2014	2015	平均
「非常にそう思う」	69.8	73.3	69.9	80.3	84.6	75.6
「そう思う」	26.7	22.9	27.6	16.6	11.6	21.1
満足度の合計(%)	96.5%	96.2%	97.5%	96.9%	96.2%	96.7%

2014 年度、2015 年度の「非常にそう思う」の回答率がそれまでよりも 10%くらい高くなっています。設問別の回答数をみると、「非常にそう思う」が全体にわたって増えていますが、特にチューターへの満足度と

スタッフの説明の分かりやすさに関する設問で「非常にそう思う」の増加が目立ちます。

2014 年度から WSD チューターのトレーナーが配置されたことにより、それまで年に数回であった研修ワークショップが毎学期 4 回から 5 回、年間 12 回から 15 回開催されるようになり、チュートリアル技術を学ぶ機会が格段に増えました。さらに、チューター同士が相互交流、情報交換し、課題を主体的に検討する場としてチューターミーティングを新設し、毎学期 3 回から 4 回、年間 10 回あまり開催しています。

また、WSD スタッフの側にも変化がありました。2014 年 9 月から WSD 専門の職員が 1 名増員されたのです。それまでは RSC の図書館員が WSD スタッフを兼務しており、年々増加する WSD の業務量の対処に苦慮していました。RSC スタッフが兼務する体制に変わりはありませんが、WSD 専門スタッフの増員によって、ていねいで分かりやすい説明が可能となり、満足度の上昇に寄与したと考えられます。

(5) 全国からの WSD 見学・面談者

WSD は全国の大学から多くの注目を集めてきました。見学・面談を受け付けた大学・大学図書館などは、北は北海道から南は九州・沖縄までに渡っています。以下にその概要を示します。

2015 年度： 6 大学・大学図書館， 1 教育委員会， 1 研究会， 計 53 名

2014 年度： 12 大学・大学図書館， 1 事業会社， 計 55 名

2013 年度： 12 大学・大学図書館， 1 事業会社， 1 インターナショナルスクール， 計 36 名

2012 年度： 4 大学， 計 14 名

2011 年度： 2 大学・大学図書館， 計 3 名

5 年間の見学・面談者： 36 大学・大学図書館， 2 事業会社， その他 3 者， 総計 161 名

WSD の見学・面談依頼者は多くの場合、ライティング支援組織をこれから立ち上げる、または改革・拡充する任務を担った教員とスタッフの方々でした。なかには大学新聞の記者、ある町の教育委員会の方々、事業会社の方々も見えました。

以上が WSD の概要です。

V-CUBE を使って学外との連携を図る

高嶋 香織 学修・教育センター
浜 敏彦 学修・教育センター

インターネットを利用して顔を見ながらミーティングをする、昨今では珍しくない Web 会議の仕組みをみなさんも一度は利用されたことがあるのではないのでしょうか。Skype や Google Hangouts、LINE に代表されるコミュニケーションツールの 1 つと言った方が馴染み深いかもしれません。

今回導入された V-CUBE は、インターネット環境と PC やタブレットがあれば、いつでもどこでも会議を行うことができる Web 会議システムです。他大学と Skype や Polycom など遠隔講義の仕組みを使ってやり取りを行った事がある場合は、それに代わるツールとして利用することができます。では、こういった特徴があるのか。大学において、授業や会議、面談などで利用するにあたり、4 つ、利点を挙げたいと思います。

(1) Skype など無料のものとは比べて画質や音質、接続状況が良いことがあげられます。途中で相手の声が聞こえ辛くなったり、映像が止まってしまったりということはありません。

(2) 予約機能があるということです。学内で行われる会議と同様に会議室(クラウド上の仮想会議室)の予約を行い使用します。下図のように、Skype などは通信を行う相手が PC の前にいてお互いが同時にコンタクトをとる必要があります。電話をイメージしていただければ良いでしょう。Polycom などは、相手側で同じ規格の機械を導入していないと通信を行う事ができません。通信する相手が海外の大学の場合、事前にメールなどで何度もやり取りが必要になり、同時にコンタクトをとるのは難しいと思います。V-CUBE では時間になったらそれぞれが参加する形で始められるため、授業やミーティングなど決められた時間に沿って使用することができます。

■ Skype など：呼出を行い、応答を待つ。不在時は通信できない。



■ V-CUBE：会議室に個別に参加する。相手の応答を待たなくても現在の人数で会議を始めることが可能。



(3) 会議中の映像を記録として残す事ができます。議事録の作成や会議に参加出来なかった人へのフォローとして使用できます。

(4) 参加者(相手)は URL をクリックするだけで簡単に参加できます。こちらから URL が記載された招待メールを送信し、URL をクリックするだけで簡単に参加する事ができます。招待された人はユーザ ID が必要になることはありません。¹

V-CUBE 利用の利点

- ・ 予約ができ、予定を組むことができる。
- ・ 会議の様子を記録(録画)する事ができる。
- ・ 相手にユーザ ID が必要なく、URL をクリックするだけで参加できる。

ICU 内で V-CUBE を使用する場合、V-CUBE アプリケーションがインストールされた PC、カメラ、スピーカーマイクがセットになった貸出機材があります。大人数で行いたい場合、インターネット環境とプロジェクタを用意すれば、すぐに Web 会議を始めることができます。貸出については CTL までお問い合わせください。



¹ 2016 年中は、招待メールにしたがって V-CUBE アプリケーションをインストールする必要があります。2016 年内にはアプリケーションをインストールすること無く、ブラウザ上から使用できるようになる予定です。

更にダイアログハウス国際会議室では、V-CUBE 専用端末やカメラ、マイクが設置されていますので、シーンに応じたさまざまな会議を、機材のセットアップや配線の手間をかけずにいつでも行うことができます。

V-Cube の利用シーン

V-Cube は、次のような場合にご利用いただけるかと思えます。

- ・授業の中で、ゲストスピーカーにリモートでレクチャーをお願いする。
- ・授業の中で、他大学の授業とジョイントでグループワークを行う。

会議室をグループの数分設定し、それぞれ相手大学のグループと議論を行う。

- ・海外実習の前に、相手校の担当教員と面接を行う。
- ・際会議室で行うイベントで、複数箇所を接続して会議を行う。

その他様々な利用が考えられます。詳細は CTL までお問い合わせください。

大学 FD 学習会 2016

紀平 宏子 学修・教育センター

2016年5月20日（金）、赤坂で開催された「大学 FD 学習会 2016」に参加した。本稿ではその概要と筆者の感想をまとめていく。

最初の講演は京都外国語大学マルチメディア教育研究センターの村上正行先生による「FDにおける情報共有・教職協働の重要性」であった。京都外国語大学には10名前後の教員と5名前後の職員で構成されるFD委員会がある。メンバーの1/3を職員が占めるのは、異なる立場の者が混ざって議論することで、より多角的な視点を取り込むことを狙いとしている。

FD委員会の年間の活動を表1にまとめた。中でも珍しいのは「授業担当者打ち合わせ会（表2）」である。

(表1) 京都外国語大学 FD委員会 年間活動

- ・ 宿泊FDの企画・運営
- ・ 学内FDの企画・運営
- ・ 授業担当者打ち合わせ会の企画・実施
- ・ 年2回の授業評価アンケートの実施
- ・ その他の研修会の企画・実施

(表2) 授業担当者打ち合わせ会

実施日	3月上旬に学内で1日かけて実施
参加者	専任教員＋非常勤講師も参加
目的	非常勤講師に大学を理解してもらう 参加者全員で大学全体の授業の問題について考える
プログラム	学科ごとのFD（午前）：カリキュラムの説明、問題点の共有・議論 全体会（午後）：学長や教務部賜などから大学教育に関する説明 講演会・研修会（夕方）：英語教育、初年次教育に関する講演・研修など

3月上旬に1日かけて実施されるというこの会には専任教員約200人に加え、非常勤講師約350人も参加する。「学生から見れば専任教員と非常勤講師の区別はつかない。それならば『京都外国語大学の教員』として抑えるべきポイントは共有しておく必要がある」というのがその理由だが、この視点には目の覚める思いがした。自分の学生時代を振り返っても確かにその通りで、常勤と非常勤の区別などほとんどついていなかった。非常勤講師であろうとも、教鞭を取っている時間はICUの顔である。常勤・非常勤の教員が一同に会するのは難しくても、例えば動画でセミナーや研修会の内容を共有すれば、ICUの教員としての一定の質保証に繋がるのではないかと感じた。

企画として面白いと感じたのは学内FDで毎年行うポスターセッションだ。A0サイズの巨大な紙に10名程度の代表教員が「自分自身の授業で工夫している点」「悩んでいる点」を書き出し、教員同士で議論を行う。普段なかなか見る機会のない他の教員の授業内容や、それにまつわる悩みを知ることができることとあって、意見交換はいつも白熱し、アンケートでも毎回高い満足度を獲得しているという。

この他にも、例えば研修会には積極的に外部講師を招聘し「反転授業の効果」「アクティブラーニング型授業の実践」といったタイトルで新しい知見を共有している。京都外国語大学のFD活動で感じたのはプログラムのバランスの良さである。外部講師の講演で外の情報を定期的に取り込みつつ、学内FDで集中的に議論を深める。この両輪がFD活動の設計において非常に重要だと感じた。

2 つ目のプログラムは「東京工業大学での組織的な FD の取り組み」というタイトルで、同大学・教育革新センター（Center for Innovative Teaching and Learning 以下、CITL）の渡辺雄貴先生がお話し下さった。東京工業大学（以下、東工大）は 2016 年 4 月より大規模な教育改革を行った（表 3 は主な内容をまとめたもの）。

(表 3) 東京工業大学の教育改革	
教育体制の再編	3 学部・6 研究科を 6 学院に、23 学科・45 専攻を 19 系・1 専門職学位過程に統合・再編
学修一貫教育体制	学院 5 年生（修士 1 年生）以上の講義は英語化
リベラルアーツ研究教育院を設置	博士後期過程まで教養教育を実施
カリキュラムの刷新	科目ごとのナンバリング必須科目として、数学・物理学・化学・英語・文系教養に生命科学を加える
学習環境の整備	アクティブラーニング型授業に対応した講義室の設置
オンライン学習環境の構築	オンライン教育開発室（OEDO）を設置し MOOC コンテンツ開発、edX を通じた配信と SPOC 等による学内活用

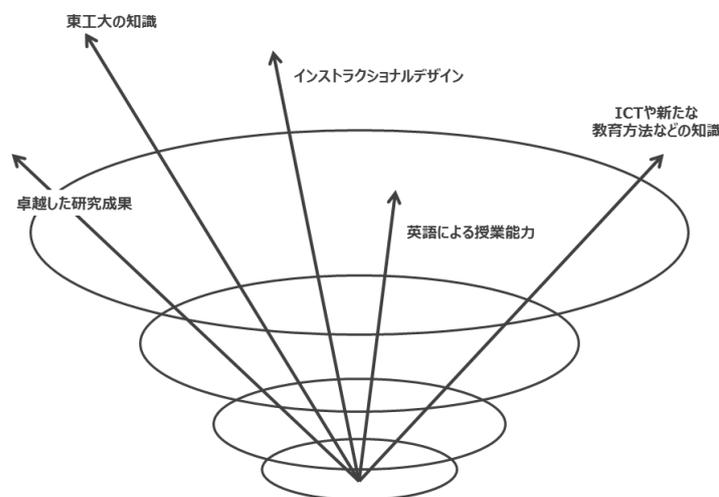
この教育改革を支えるためには教員力の底上げが必要となる。そこで東工大では、以下に記す 5 点の能力を重点的に改善するために、FD 活動の「スパイラルモデル（図 1）」を作成した。

まず「卓越した研究成果」、これは教育改革前から取り組まれてきたので継続とした。「東工大の知識」は東工大の歴史やデータに加え、今の 18 歳がどのような文化背景を持っているかを知識として取り入れることで、より効果的な授業設計を目指すものである。「英語による授業能力」は、教育改革により修士 1 年生以上の講義が全て英語化されたため、教員側もそれに対応する英語力を身につける目的で設定された。

「ICT や新たな教育方法などの知識」は、ICT をはじめ、アクティブラーニングや反転授業の手法などを実践的に学ぶものである。そして「インストラクショナルデザイン」では、授業設計に必要な諸理論を実践的に身に付ける。例えば「授業設計の際に『入口』『出口』『方法』の 3 点を抑えた構造にすると、理解に繋がりやすい」という教育学的理論を学ぶ研修を、研修自体を同じ構造で展開することにより、参加者自身が体感できるようにしている。

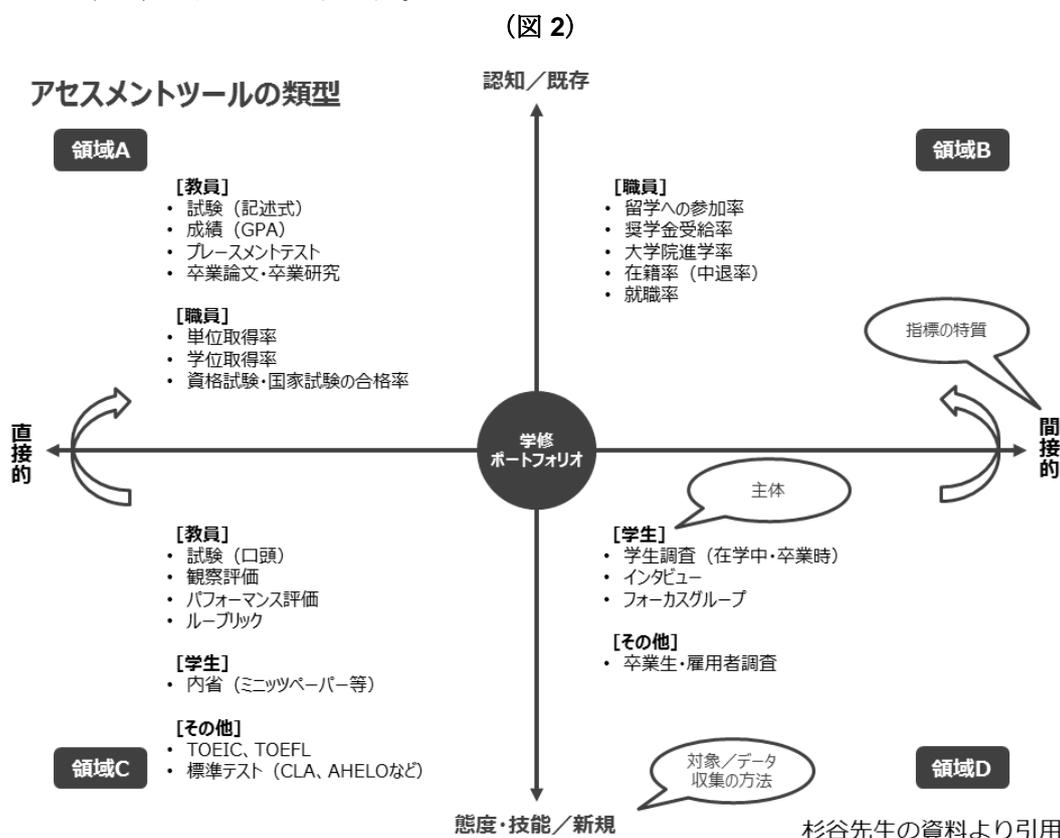
渡辺先生の講演で感じたことは、FD プログラムの体系的な設計の重要性である。まず現状で抱えている問題を洗い出し（入口）、FD 研修を通じて何を成し遂げたいのかを設定する（出口）。入口と出口という 2 つの「点」が決まれば、その点と点を結ぶ線「方法」で間を結ぶのみである。インストラクショナルデザインの諸原理を使えば、合理的なプログラムが簡単に設計できる。非常に即効性のある研修であると感じた。

(図 1) スパイラルモデル



渡辺先生の資料より引用

最後のプログラムでは「高等教育政策同行にみる教育改革と質保証 ～学修成果の可視化から、自大学のFDを考える～」というタイトルで、青山学院大学の杉谷祐美子先生のお話を伺った。前半2つのプログラムはどちらかと言えば実用的な側面からのアプローチだったが、この講演は大学の質保証、言い換えれば「学習成果の評価」へと転換期を迎えている大学の評価手法を外観する内容であった。まず、なぜ今学習成果が重要視されるようになったのか社会的・経済的背景を確認した上で、具体的な学習成果アセスメントの方法について類型化が行われた（図2）。



しかしながら実はこれらも完璧なアセスメントツールではなく、妥当性（Validity）、信頼性（reliability）、公正性（equity）、実行可能性（feasibility）の4つの視点において、何らかのアンバランスさを有しているという。例えば評価対象をどれほど忠実に測定できているかを示す「妥当性」を高めようと、多角的なアプローチで対象者を何度も評価した場合、おそらく評価時間は長大なものとなり、「実行可能性」の部分が低くなる、といった具合である。

このような状況において、近年「新しい評価方法」として脚光を浴びているのが「ルーブリック（rubric）」である。「1つ以上の評価観点とそれについての1つ以上の数値的な評価尺度、および尺度の中身を説明する評価基準の記述語からなる」とされるルーブリック（表4）は下記の点においてその意義が評価されている。

(表4)

	評価尺度 1	評価尺度 2	評価尺度 3
評価観点 1	評価基準 1-1	評価基準 1-2	評価基準 1-3
評価観点 2	評価基準 2-1	評価基準 2-2	評価基準 2-3
...

1) 学生が自らの学修活動の評価ができる、2) 評価の目安がわかり、学生自身の行動が明確になる、3) 評価者内・評価者間で評価がぶれない、4) 採点時間を節約し、詳細なフィードバックができる（山田2013b）。これまでの評価基準に比べてバランスのとれた作りとなっているルーブリックだが、もちろん課題も残る（表5）。

(表 5) ルーブリックの課題
・開発にあたっての妥当性・信頼性・実行可能性の確保とジレンマ
・評価基準の設定 (→モレなく、ダブリなく、複数の内容を含まないように)
・評価尺度の設定 (→バラつきが出るように)
・実例 (アンカー) の収集と評価基準との対応
・学生の安易な適応

万能なアセスメントツールは存在しないが、いくつかを組み合わせ、弱みを補完し合うことでかなり精度の高い学習成果の評価をすることができるのではないかと思う。ICUではすでに図2にあるアセスメントツールのほとんどを実施済みなので、次の段階はこれらのアセスメントによって得られたデータから教育実践の目標に照らして達成度を価値判断する「エバリュエーション」のステージに移行すべきだろう。これまで感覚的にICUにおける「調査結果の活用・分析、複数の調査の有機的な紐付け」が必要だとは感じていたが、このように論理的にその必要性を示されると非常に説得力があった。

今回の3つの講演は同じFDというテーマに対し、異なるアプローチで迫る内容で、大変中身の濃いものであった。ちょうどFDプログラムの体系的設計や、アセスメント結果の活用などについて方向性を検討していたところだったのでタイムリーな研修でもあった。「犬も歩けば棒に当たる」とは良く言ったもので、ICUの森から抜けだして外の情報に触れることの重要性を感じた。今後も機会があればぜひ外部セミナーに参加していきたい。

※当日のプレゼン資料にご興味のある方は紀平までお問い合わせ下さい

編集後記

CTL(学修・教育センター)がオープンし、FD 関連業務とともに引き継いだニュースレターも、この号で3号目となりました。今回もたくさんご投稿いただき、大変ありがたく思います。

先学期、ある非常勤の先生から「授業効果調査の結果を受け、授業改善のために受講生のみなさんからぜひ直接お話を伺いたい」というお申し出があり、受講生の方にお声がけをし、CTL のオープンスペースで、意見交換会を開催いたしました。おそらく前例のないことだと思いますが、先生も学生も大変熱心で、非常に有意義な会となりました。TES をこのような形で活用していただけるのは大変うれしいことです。CTL のスペースも夏休み中にさらに模様替えをしました。ぜひ様々な用途にご活用いただきたいと思います。

TES と言えば、今年度から、オプションルクエスションの指定や、集計結果や学生コメントの返却をメールベースで行わせていただいています。紙の方が見易かったという方もいらっしゃるかもしれませんが、一方で、1学期に4000枚以上のコピーと郵送費が不要となり、作業効率も大幅に改善されました。読みにくい点についてはまだまだ改善の余地もあると思いますので、お気づきの点などありましたらお知らせください。

記事または CTL に関するご意見、ご感想などありましたらお気軽に、ctl@icu.ac.jp までお寄せください。ニュースレターへのご投稿もお待ちしています。

小林 智子
学修・教育センター

Published by Center for Teaching and Learning
International Christian University

ILC-212 3-10-2 Osawa, Mitaka-shi, Tokyo 181-8585 Japan
Phone: (0422)33-3365 Email: ctl@icu.ac.jp